

地域の発展につくした人 2

「文化都市しんしろ」をめざした 元市長

こんどうちやういち
近藤長一氏

1916年(大正5年)、富岡の農家の8人兄弟の長男として生まれた近藤氏は、家をきりもりしながら、尋常高等小学校を卒業しました。向上心の旺盛な性格で、独学で「読み・書き・そろばん」の練習励み県議会議員の秘書として行政の道を志しました。

1962年(昭和37年)、八名小学校の開校にあたり、建設委員となり、「校舎は、運動場は、通学距離は、建築費用は・・・」など細かな点まで意見の調整にあたりました。旧八名村始まって以来の大事業で、いろいろな意見があり、話し合いが進まないことが何度もありましたが、子どもの将来を思い、苦勞を乗り越え建設の仕事を進めました。

1975年(昭和50年)5月から16年間、3代目新城市長として、ふるさとを思う強い気持ちを持って、数々の仕事を成し遂げました。

旧新城市は、広い面積に比べ人口が少ないので、全家庭に水道を引くことは、莫大な費用がかかる大事業でしたが、「市民が、等しく文化的な生活をするための絶対条件」と考え、水道完備を実現させました。また、奥三河の玄関口として、国道151号・国道301号沿線の整備や、現在工事が進んでいる第2東名高速自動車道路の建設の基礎固めに、いろいろな団体との話し合いに駆け回りました。企業誘致にも力を入れ、八名企業団を完成させました。多くの市民が利用している桜淵公園の整備や愛知県総合公園・新城文化会館を建設しました。現在も行われている市民文化講座やふるさと講座等の事業の発案者です。「まちづくりは市民から」の考えのもと、学校施設の充実にも取り組み、市長だった16年間に市内11校の木造校舎を全て鉄筋化し、合わせて体育館の改築や運動場の拡張なども行いました。

このように30歳から43年間という長い間、新城市の行政の仕事にたずさわり、「文化都市しんしろ」をめざしました。三等瑞宝章・従四位を受賞するとともに、新城市の名誉市民となりました。

家庭では、「正直に生きろ。うそは必ずばれる。」「あいさつをしろ。」「船が出ていくように、はき物をそろえろ。」が口癖でした。新城市に残る記念碑には、近藤氏の書かれた文字が多く残っています。

